平成26年 9月

覃瀅　学位論文審査要旨

主　査　　前　垣　義　弘
副主査　　渡　辺　高　志
同　　小　川　敏　英

主論文

High incidence of asymptomatic cerebral microbleeds in patients with hemorrhagic onset-type moyamoya disease: a phase-sensitive MRI study and meta-analysis

（出血発症型もやもや病では無症候性微小脳出血が高頻度に観察される：磁化率強調像およびメタアナリシスによる検討）

（著者：覃瀅、小川敏英、藤井進也、篠原祐樹、北尾慎一郎、三好史倫、高杉麻利恵、渡辺高志、神納敏夫）

平成26年　Acta Radiologica　掲載予定

参考論文

1. Primary fourth ventricular meningioma: a case report of an adult male

（第四脳室原発髄膜腫：成人男性の症例報告）

（著者：覃瀅、金崎佳子、高杉麻利恵、篠原祐樹、神納敏夫、黒崎雅道、小川敏英）

平成24年　Clinical imaging　36巻　379頁～382頁

審　査　結　果　の　要　旨

本研究は磁化率強調像及びメタアナリシスを用いてもやもや病症例における無症候性微小脳出血の頻度、個数、局在、追跡期間中の再発出血の有無を調べ、症候性脳出血との関連について検討したものである。その結果、磁化率強調像では、従来のT2*強調像に比べ、無症候性微小脳出血の検出感度が高く、3TによるT2*強調像は1.5TによるT2*強調像より無症候性微小脳出血の検出感度が高いことが示された。また、無症候性微小脳出血はもやもや病における症候性脳出血の好発部位である側脳室近傍深部白質に高頻度に観察され、さらに、出血発症型もやもや病患者は他の発症型よりも微小出血の頻度が高いことも示された。本論文の内容は、磁化率強調像を用いた無症候性微小脳出血の検討が、もやもや病における将来の症候性出血の予測に役立つ可能性を示唆するものであり、明らかに学術水準を高めたものと認める。